

第1回サンゴ礁保全行動計画提言書作成 TF 会合・議事録

(議事録作成：灘岡)

開催時間：2014年7月26日(土) 13:00-17:30

開催場所：東京工業大学大岡山キャンパス西8号館 W311

出席者(敬称略)：大森 信, 茅根 創, 中野義勝, 宮本育昌, 熊谷直喜, 柳谷牧子, 千葉日比魚、灘岡和夫(8名)

議題(灘岡による配付メモ資料)：

1) TF 発足の背景・必要性

ーサンゴ礁生態系の現状・・・サンゴ群集が「減ってきた」だけでなく「回復しなくなった」(レジリエンスの減退)→如何にしてその原因を包括的に理解し、有効な方策を提言できるか？

ーサンゴ礁学会での保全関連主要事項

- ・「危機にある世界のサンゴ礁の保全と再生に関する沖縄宣言」@第10回国際サンゴ礁シンポジウム(2004年, 沖縄)
- ・「造礁サンゴの移植に関するガイドライン」(サンゴ礁学会, 2004年)
- ・「造礁サンゴの特別採補許可についての要望」「造礁サンゴの特別採補許可にあたっての提案」(サンゴ礁学会サンゴ礁保全委員会, 2004年)
- ・学会版サンゴ礁生態系保全行動計画(2007年9月公表)
- ・学会誌解説記事「造礁サンゴ移植の現状と課題」by サンゴ礁保全委員会(2008年)(cf. 環境省版サンゴ礁生態系保全行動計画(2010年4月公表))
- ・最近の企画委員会や保全委員会等でのサンゴ礁保全(移植も含めた)ガイドライン作成の必要性の議論
- ・もうすぐ更新時期を迎える環境省版行動計画の更新に際して、サンゴ礁保全のためにとるべき包括的アクションに関する学会としての提言書を作成



TF 発足が7/12の評議員会で承認される

2) TF のミッション・活動体制

- ・サンゴ礁保全に向けてとるべき包括的アクションを客観的立場からとりまとめ提言する。(最終的には、想定される各実施主体に対する提言まで含む?)
- ・TFには広く学会員からの参加を募る(オール学会体制)
- ・今年度末を目指してとりまとめる
- ・提言書の骨組みについては、今年10月に開催予定のCBD-COP12(@韓国)および第29回ICRI総会(@OIST)に向けて、9月上 or 中旬までにとりまとめる

3) 現在の（環境省版）サンゴ礁保全行動計画の課題

- ・内容面の問題：各実施主体の既存あるいは既に予定されている施策集的な内容になっている感が強い
- ・行動計画を活かしていく上での運用面の課題：各実施主体に活かされていない



学会とのリンクをかなり密にした形で行動計画を更新し、運用面においても密な協力体制を確立できないか？

4) どのような提言書にすべきか？提言書の骨格となる主要課題は？

例)

a) 保全行動の対象の明確化

- ・狭義の「サンゴ礁」ではなく、マングローブ等の周辺系も含んだ広義のサンゴ礁生態系
- ・「サンゴ礁-人間」系としてのトータルシステムの変遷と現状、将来に向けてのあり方を示す必要

b) サンゴ礁生態系の価値と危機的現状のより包括的な評価・アピール

c) MPA

目標は「量」×「質」---具備すべきMPAの「質」とは？それを具体化し、効果的に運営・管理するメカニズムは？

cf. CBD-COP10@名古屋での愛知ターゲット

（目標10）2015年までにサンゴ礁その他の脆弱な生態系について、その生態系を悪化させる複合的な人為的圧力を最小化し、その健全性と機能を維持する

（目標11）各国が2020年までに、少なくとも沿岸域及び海域の10%、生物多様性を生態系サービスにおいて特別に重要な地域を効果的に保全する

d) サンゴ移植の現状の課題と方向性

- ・「サンゴ移植の成功」≠「サンゴ礁生態系再生の成功」
- ・包括的保全活動中での「移植」の位置づけの明確化
- ・どのような場合に移植は有効なのか（有効でないのか）？といった基本的な問いにもまだ十分答えていない。
- ・スケールギャップ、コストの問題

e) 国際連携

- ・ICRI等の既存の国際組織で十分な連携が図られているか？
- ・わが国の貢献体制・内容は十分か？
- ・戦略的な国際連携展開のあり方は？

f) 人材育成-特に地域の保全活動の核となる本格的人材の育成

- ・「けっきょくは人」という、多くの現場での認識
- ・これだけ人材育成の必要性が叫ばれているにもかかわらず、人材育成が進まない原因の解明と、現状を打開するための環境・制度作りの課題の同定、関係者間での認識の共有

議論（フリートーク）の要点：

<現状認識、問題点>

- －愛知ターゲットの中で指標値の達成状況がマイナスになっている 5 項目のうちの一つがサンゴ礁（宮本）
- －わが国の環境省行政の中でのサンゴ礁の位置づけが弱すぎる（茅根）
- －環境省行政は今は生物多様性や里山イニシアチブの方がメイン（宮本）
- －MPA-network database については後発の world-wide 版の方に置き換わりつつある。MPA-Global、Reef-base（柳谷）
- －どうやったら行動計画をうまく活かすスキーム（関係者がうまく関わるスキーム）が出来るか。サンゴ礁に特化した行動計画を作る意味を明確にする必要（柳谷）
- －ラムサール：黄海（干潟消失）の問題が大きい（宮本）
- －ラムサールは水鳥保全から湿地保全のための条約と変化している。湿地の community based management や wise use の観点が特に重要になってきている（柳谷）
- －里海・里山の中にサンゴを組み込むことができると、時流に乗りやすい（柳谷）
- －教育委員会が入っているかどうか重要。教育指導要領にどのように入れ込むか。（中野）

<省庁間、対省庁に関して>

- －省庁間の連携を強化していくことが重要。NGO が事務局になり定期的に円卓会議を開催し、うまく動いている実例もある（柳谷）
- －環境省に対するサンゴ礁保全の重要性のロビーイングが重要（宮本）
- －かつては「環境庁は海は手を出すな」と言われていた（大森）

<行動計画のあり方>

- －「里海行動計画」でも良いのではないかと（大森）
- －「里海」を入れるのであれば、「将来に向けてのこれからの里海のあり方」、というスタンスで行動計画に盛り込むべき（灘岡）
- －意見発信・インプットの仕方、タイミングが重要（宮本）
- －保全手段としてのゾーニング（大森）
- －地球環境問題を本格的に取り上げて行くべき（茅根）
- －サンゴ礁生態系の多面的機能をもう少し詳しく包括的に示す必要（熊谷、茅根）

<行動主体や保全行動展開の仕方に関して>

- ーモデル地域を設定した取り組みが重要（宮本）
- ーサンゴ礁域に限らず地域人材が地域づくりに貢献している良い事例（隠岐など）を示すべき（宮本）
- ー市町村レベルの重要性（灘岡）
- ー行動計画の実施主体の多様化も有効と思われる（柳谷）

<保全行動の対象地域に関して>

- ー最近の厳しい予算状況や途上国の経済発展という背景から、途上国への支援はやりにくくなっているように感じている。日本国内での施策との関連性等説明は最低限必要ではないかと考えている（柳谷）
- ー高緯度サンゴ群集域をどう捉えるべきか、サンゴ礁学会として考えの整理があればご教示いただきたい（柳谷）
- ー今年3月に、海の生物多様性に軸足を置いて指定されたはじめての国立公園として、慶良間諸島国立公園が新設された。同公園はザトウクジラの繁殖海域等も考慮されており、海域部分が全体面積の約96%に達している（大森、柳谷）
- ー海外では、礁斜面、離礁が対象。沖縄ではイノーが対象。（中野）
- ー地域研究的スタンスが重要。平成大合併で小学校を失った地域が沖縄島にはかなりある。公民館しか残っていないが、それは老年しか使われない。伊江島の漁業はけっこう盛ん（中野）

<人材育成に関して>

- ー人材育成：現場のニーズと供給側を繋ぐパスの多様化（灘岡）